

○ 須賀由貴* 金子美和 高橋美保**

(聖徳大*, 秋草学園短大**)

目的 幼児教育からみた小学校教育との連携のあり方について着目し、幼児期における生活習慣の定着を、小学校へつなげるためにどう働きかけているのか、その実態を探った。

方法 まず実際に幼児がどのような活動をし、体験しているのかについて、食事時間における幼児の具体的な活動や体験についての検討を加えた。つぎに、保育者が小学校との連携に対し、どの程度の意識をもって進めているのか、その実態を把握するため、幼児教育から小学校教育への連携についての意識調査を行なった。また、平成11年度に卒園した子どもに対する、小学校入学後に生活習慣定着に関する実態調査を行なった。

結果 N保育園における生活習慣の取り組みは、箸を上手に使えるなどの技能の習熟に留まらず、子ども達の気持ちや意欲を重視した自己表現にウエイトをおき、自分の量を把握させることなど、自立に向けた生活習慣の定着にポイントがおかれていた。また、事例研究から、子ども達にとって、よりよい小学校と幼稚園との連携を図っていくためには、まず教師の話し合いを含めた、人的な環境が大きく影響を及ぼすことがわかった。さらに、保育者に対して、幼児教育から小学校教育への連携について意識調査をした結果、幼稚園では94.7%、保育園では80.0%が実際に連携をとっており、意識は高いものの、その内容は入学直前の話し合いのみがほとんどであった。以上の結果をふまえて、N保育園年長児の、小学校入学後に行なった生活習慣定着に対する実態調査結果から、基本的な生活習慣は定着していたものの、家庭における食前・食後の挨拶や下校後のおやつへの摂り方などが問題として残った。子どもの生活習慣定着については、今後、家庭教育のあり方も課題として取り組まなければならないであろう。